氏　　名	SON Jongjun（ｿﾝ ｼﾞｮﾝｼﾞｭﾝ）
学位の種類	博　士（芸　術）
学位記番号	甲第　37 号
学位授与日	平成　23 年　3 月　23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第　1 項該当
論文題目	**「Defensive Measure」シリーズ考** **ーサイボーグと鎧の精神的及び外形的関連性について**
審査委員	主査　教　授　　中村隆夫
	副査　教　授　　島尾　新
	副査　教　授　　石井厚生
	副査　国立新美術館　学芸課長　　南　雄介

内　容　の　要　旨

本研究は、サイボーグと鎧の外形及びその意味性や、その特性を借用し発展させている私の作品のテーマ「 Defensive Measure 」概念と、その意義は何なのか、また「 Defensive Measure 」の概念はどのような制作過程や概念的脈絡を通じて表現されているのかについて考察することを目的とする。

本研究の「 Defensive Measure 」（自衛的措置、防御道具）の概念的意義を理解するためには、作品の精神的意味を把握するとともに、外観の持つ意義に関する考察が必要である。

まず作品の精神的意味を把握するためには、「サイボーグ」という概念に対して論じる必要があり、そして外観的意味を把握するためには、「鎧」が持つ外観的特性である図形及び装飾的要素による視覚効果についての分析と共に、彫刻において基礎造形手段である「面的造形技法」と「線的造形技法」の比較分析を通じ、線的造形技法に対する「 Defensive Measure 」の制作上の必然性、また私が主に使用している素材である「アルミニウム」に関する考察を行っている。

このような考察過程を通じて、私の作品テーマである「 Defensive Measure 」の意義を明らかにすることに本論文の重点を置く。

本論文の導入部では、主にサイボーグの意味について、その概念的内容の分析及びサイボーグの外形的イメージ分析を通じて、サイボーグが持っている意味性が私の作品の外形的、概念的意味にどのような影響を及ぼしているかということについて考察し、また視覚芸術の中で機械的外形性を借用している様々な作品は、主にサイボーグが持つ概念を活用

しているということについて重点的に論じる。

本論文ではサイボーグ論に関し、ダナ・ハラウェイ（Donna Haraway）が主張する「狭義におけるサイボーグ」と「広義におけるサイボーグ」の理論を紹介する。

このことは、私が自分の作品を眺める観点の変化や作品を制作する過程における様々な変化に対する説明に重要なものである。

またサイボーグの概念を導入して制作を行なった作家であるステラーク（Stelarc）とイ・ブル（Lee Bul）の作品を提示し、私の作品テーマとの内容及び外形的にいかなる関連性があるのかについて比較分析する。

また鎧が持つ英雄的要素という概念に関しては、外観的、プロポーション的な外形上の分析とともに、鎧の意味性を把握するために、東洋と西洋の鎧に見られる装飾的要素に関する分析を試みる。

伝統的に鎧の機能は、単に敵と戦うための防御道具というだけではなく、英雄性という威厳を持つ人間、つまり普通の人間のメカニズムを持っている人物が鎧の特性である図形及び装飾的要素を利用することにより、いわゆる「英雄らしい」外観を持つ者へと変容する。

本論文では、そのような鎧が持つ外観的特性である図形及び装飾的要素を活用している事例として映画「スーパーマン（Superman）」や、ロボットアニメーション「機動戦士ガンダム（Gundam）」と「テコンＶ」を紹介する。

「鎧の図形及び装飾的要素がもたらす英雄らしい外観」という概念は、私の作品テーマである「Defensive Measure」の意味性と非常に強く結び付けられる。

これは一般的に社会的人間にとっての（何らかのコンプレックスを持っている弱い存在としての）「服装」のような性格を帯びている。

「何か」を着用すれば、社会的に抑圧されている、何らかのコンプレックスを持つ人間の弱点を隠しながら、イメージ的に強い存在に変容させるのが「Defensive Measure」の役割である。

本論文では、ダナ・ハラウェイの「広義におけるサイボーグ論」と「鎧が持つ図形及び装飾的要素による外観的特性」について、私の作品テーマである「Defensive Measure」（自衛的措置、防御道具）の概念的意義と関連させながら論を展開している。

本論文は結論を導くために、私の作品と外形的に、そして概念的に共通点があると思われる様々なジャンルの作品を提示して分析し、最後に私の作品を提示するという流れを取っている。

私の作品の主要なテーマである「Defensive Measure」という概念に対する制作上のプロセス、すなわち一般的に普通の人々のなかから「弱者」と考えられている人たちを作品のモデルの対象にしていたことから出発し、外見上何も障害が見られない「一般人」を対象にするようになったことへの経緯の必然性について論理的に説明し、現時点で考え得る作品が持つ意義とともに、作品の時空間的位置及び方向性に対する考察も行う。

審 査 結 果 の 要 旨

1.作品の独自性

孫鍾準君の彫刻作品は身体に装着するという独特なものである。何故彼が普通に展示あるいは設置するのではない特殊な彫刻を制作するのかという理由に、彼の彫刻作品のシリーズ名にもなっている「Defensive Measure」という概念との関連がある。本来は軍事用語で「潜在的な敵から国を保護する軍事行動あるいは資源の保護」という意味であるが、孫君はこの概念を自らの作品に援用した。

攻撃・防御という関係を軍事的敵対関係ではなく、人間社会における差別者と被差別者という関係に着目することから始めた。彼は作品発表に際して、彫刻作品それ自体、あるいはそれを身に着けた人物のいる写真という二つの方法を取る。そのモデルとなった人物は何らかの意味で明らかに社会的に差別された者、阻害された者、弱者である。やがてその対象は一般の人間そのものへと移った。誰でもが何らかのコンプレックスを抱えており、それを乗り越えるための「防御装置」としての「Defensive Measure」へと、作品のコンセプトが少し変化してきた。

彼の作品を実際に身に着けて生活することはあり得ないし、それを身に着けても実際に強くなれる、あるいはそれが武器になるわけではない。素材は金属としては弱いアルミニウムであること、また万が一作品を装着しているときに外部から強い圧力がかかると、装着者のダメージは通常よりも大きなものになってしまう。孫君が考えているのは、武器や鎧のような実質的な攻撃あるいは防御用具ではない。そこで中心となるのは装着者の心理の変化、あるいは彫刻作品を見ることによって何らかの精神的変化を促すことであり、理不尽な差別が社会には確かに存在し、また社会的抑圧を受けていない一般の人にもコンプレックスがあることを知る契機となることが、制作の主たる目的になっている。孫君自身は一言も発していないが、制作の根底には社会的正義感と人間に対する愛がある。視覚を通じて人間の弱さを認め、それを克服する力へと心理的に変化させ、しかも体に装着するというところに、今までの彫刻史には見られなかった独自性がある。

2.論文の発想における独自性

孫君の論文で画期的だったことは、「サイボーグ」という概念の導入して、彫刻作品を身に着けることがどうして心理的にコンプレックスを克服することに繋がるのかという論理展開にある。通常は人間の頭脳を持つ人間に機械的な装置が組み込まれたものを連想するが、孫君はダナ・ハラウェイの「狭義におけるサイボーグ」、つまり眼鏡でも何でも良いが、ちょっとした何かを身に着けることによってその人の身体機能を補ったりすれば、

それはすなわちサイボーグとして考えられるという理論に着目したことにある。SFなどに見られる機械的サイボーグとはまったく異なり、日常的レベルで考えられるサイボーグである。特に感心したのはアメリカの実験生物学者、科学史家、社会学者でもあるダナ・ハラウェイから、「狭義におけるサイボーグ」という概念を借りてきたことは、芸術博士の論文としては驚異的な発想であり展開である。

自作品の「Defensive Measure」シリーズの外見的特徴である英雄性の意義について詳しく言及している。一般の鑑賞者は実際に作品を身に着けることができない。作品として鑑賞してもらうことによって、何らかのコンプレックスを克服する心理的な変化を促さなければならない。作品を見てその力を促すためには、アニメなどのサイボーグ・ヒーローが持っている強さを感じさせるプロポーションなどの美の典型に注目した。この外観の英雄性を感じさせることによって、孫君の作品を見るだけで、あるいは装着した自分を想像することによって、心理的な力は生じてくるだろう。孫君はヒーローの外見的イメージを幾つも例に挙げ、幾つかの典型的なパターンに分類し、中世の西洋及び東洋における鎧兜との関係性について調査している。この成果は孫君の作品を見たときに、ヒーロー的な強さを感じさせる表現と結びついている。

外観の強さと心理的な力の湧出、しかも装着することを前提とした作品の意義を、「狭義におけるサイボーグ」概念に対する独自の考察を加えつつ見事に説明し得ている。ここにこの彼の論文の独自性がある。

3.実制作者ならではの説得力

「Defensive Measure」の概念は攻撃ではなく防御である。孫君の作品の素材がアルミニウムであることは必然的であった。武具などでは鉄などの堅い金属が使われるが、「Defensive Measure」にとって材質は攻撃に不向きな素材である必要性がある。彼は長い研究の末、アルミニウムという素材にたどり着いた。アルミニウムと彫刻で使われる他の金属素材との比較は詳細で、実制作者ならではの説得力があり、実技系の学生の論文の醍醐味がある。

さらにアルミニウムという素材は、溶接というホットジョイントに向いていないため、ボルトやリベットによるコールドジョイントをせざるを得ない。そこから出てくる形は面的なものではなく、線的なフォルムが特徴となる。ボルトやリベットを多用するため、先鋭的なフォルムが際立つことになる。それは一見すると武器のような鋭さを持ちはするが、アルミニウムという柔らかい素材であるために武器としての機能は持ち得ない。

こうしたアルミニウムという素材から来るさまざまな特徴を総合的に考慮し、心理的な力を誘因するためのフォルムとは何かという考えが融合した結果が、孫君の「Defensive Measure」シリーズであるということがよく理解できる。

4.総合的な評価として

一般の人間が持っているコンプレックスとはどういうものか、また孫君自身にどのようなコンプレックスを抱いているのかという疑問が生じる。しかし論文においては露悪的に自分のコンプレックス、悩みを告白する場ではない。孫君自身にとって当然ながら論文を私的な場として考えたくはないという強い思いがあったことは確かである。

今後、一般的な人間が持っているコンプレックス、個人的なコンプレックスを直視し、考察する機会はますます多くなり深くなっていくであろう。その考察の結果が、孫君の作品に新たな展開をもたらすことになるだろうことは容易に想像がつく。

体に装着する彫刻という形態の新しさ、視覚を通じて心理的な部分にまで影響を及ぼすという彫刻概念は、本論分で充分論理的に語られている。作品と論文を総合的に見て、孫鍾準君は多摩美術大学博士後期課程において博士号を取得するのに充分な資格を持つ学生であると判断する。